

サンフォード大学海外臨床薬学研修について

薬学科 6年 臨床医学研究室 水野絵莉

「百聞は一見に如かず」とは、まさにこのことかと、実感するような貴重な経験をすることができました。海外臨床研修に参加したいという熱意が強く、事前に先輩方の研修報告を拝見し、米国の薬学教育について、リフィル制度があること、お薬手帳がないことなど、ある程度米国と日本の薬剤師の相違点について知ったつもりではいても、実際に現場に行ってみなければわからない問題や雰囲気があることを肌で感じ取りました。

医療施設を訪問し、米国の薬剤師の業務及び役割を知る絶好の機会をいただきました。私は、内科の外来をおこなっているクリニックである Princeton Hoover と、ICU、SICU、MICU を有し、バーミンガムを支える大病院である St.Vincent's Birmingham を見学させていただきました。

前者では、主に生活習慣病（高血圧、高脂血症、糖尿病）について扱っており、薬剤師は食事指導、吸入指導、インスリン自己注射の説明、予防接種、臨床検査値のチェックをおこなっていました。特にワーファリン服用患者に対しての INR 値のチェックは重要な仕事であり、同じ系列の病院であれば患者カルテから情報を得ることができるので、INR 値の変動が一目でわかります。薬剤師の部屋に患者が来て INR 値を測定し、その場で INR 値の変動と、今後の対策について説明し、それらをまとめた記録ノートを作成します。やむを得ない理由でクリニックに患者が来られない際は、自宅で測定した INR 値を教えてもらい、電話で指導をするという柔軟性もありました。施設内に X 線、CT、MRI ができる検査室や心肺機能検査室があり、他の病院に行かなくてもそれらのデータが収集でき、患者にとっても医療従事者にとっても非常に有効でした。また、医師、薬剤師には各々個人部屋があり、どの部屋も患者がいないときは扉が開け放たれており、とても開放的なところが印象的でした。実際、説明を受けている際にも何度か医師が薬剤師に意見を求めに来るといった場面に遭遇し、医療人同士がコミュニケーションを取りやすい職場環境もチーム医療に必要なのだと感じました。最も、薬剤師に聞いてみよう、と医師が積極的に聞きに行くというような、薬剤師に対しての信頼があつてこそ、この環境が生きてくるのです。

後者では、がん病棟を見学することができました。患者の経過面談では医師に薬剤師が同伴し、副作用の発現状況や今後の発現リスクについて説明をしていました。その後、臨床検査値のデータを参考に医師と薬剤師が治療法について話し合っており、医師と薬剤師の距離が近いことを実感しました。病院の見学を通して一貫してついてまわる問題が、医療費の問題、すなわち米国の保険制度の問題でした。日本の国民皆保険はある程度一律の保険料が保障され、安定した医療を受ける体制が整っていることに対して、米国では取得賃金によって加入できる保険が異なるため、貧困層で使用できる薬剤の選択の余地がなかったり、保険未加入で医療を受けられない人がいるという現状がありまし

た。保険によって受けられる医療に差が出ることから、治療法について患者とよく話し合う必要がありました。様々な治療法の中で、薬剤について説明する薬剤師は非常に大きな役割を果たしていました。もっと日本の医療保険制度について学ばなければならないと反省しました。色々な可能性を探り、様々な観点から、最良の医療を提供できる薬剤師になるには、どうしたらよいでしょうか。

米国の薬学教育では、臨床現場を想定した症例について生徒が中心となって考えます。早くから様々な症例について触れ、自ら問題を見つけ出し、その問題を解決する方法を模索することで、実践的なスキルを身に付けることができます。基礎知識はもちろん大事ですが、その知識をインプットするだけでなくアウトプットすることでさらに理解が深まっているように感じました。生徒がこうだと考えたことを話し合い、それに対して講師がただ間違いを否定するのではなく、生徒が考えたことに対してその努力は認めつつ、もっと他の考え方もあることをさりげなく示唆し、生徒のやる気をうまく引き出すような、そんな授業が理想です。生徒が主体的となって積極的に講義に参加するだけでなく、講師も生徒を上手にフォローすることでよい授業が生まれます。未知の事象に対してどうアプローチをしていけばいいのか考えるために、自ら積極的に問題に対峙し、常に「なぜ？」を追求する貪欲さを持つようと思いました。

現場の薬剤師が持つ薬剤師としてのスキルが、一朝一夕では身に付くものではないということを知り、いかに薬学教育が卒業後の薬剤師としての職能に関わってくるかを思い知りました。どこに問題があるのか気づき、解決する能力を身に付けることで、医療現場で薬剤師が活躍できる幅がもっと広がるという確信を得、同時にその責務が私たちひとりひとりにあることを再認識する毎日でした。

また、米国の薬剤師だけでなく、アフリカ南部に位置するビクトリアの滝で有名なザンビアの薬剤師とも交流を深めることができ、非常に有意義な時間を共に過ごすことができました。ザンビアではH I Vが深刻な問題となっており、公的な保険制度がない中で、患者負担分の治療費が無料であるという事実を初めて知りました。それでも自分がH I Vだと認識していない人が、まだたくさんいるという現状と、それに向き合う医療従事者もまた不足しているという問題など、取り組まなければならない課題がたくさんあることを教えていただきました。

米国の薬学教育について学ぶ、ただそれだけではなく、異文化と触れることで受ける刺激は言葉では表現し難く、何事にも代えられない経験となりました。今後私が生きていく上で、薬剤師として以前に、一人の人間として大きく成長できたのではないかと思います。また、薬剤師として今後の自分がどうあるべきか考える機会となりました。

最後に、後援会の皆様並びに本研修を援助して下さった方々に深く御礼申し上げます。学生の時分にこのような貴重な経験させていただき、誠にありがとうございました。